

33 〈ニッポン図書目録〉の系譜

岡村 敬二（大阪府立夕陽丘図書館）

（1）世界を映す、日本が映る——序にかえて

ルーディ・ラッカーの『ホワイト・ライト』¹⁾というSFのなかに「形相の図書館」というのがでてくる。それは諸個人の、可能性のある生涯の全部を完璧に書いた書物を厳選して収蔵するという図書館のことで、この図書館の司書はこう説明している。「形相の図書館は精選されていてね。テーマが人間理解の基本的範疇にあって、徹底的に表現してある本しか収蔵しない。部分的な、異星の、あるいは特異的な作品には興味がない。現実には地球にある重要な形相を、完璧かつ決定的に扱ったものだけを、カタログに載せている」と。そして、この図書館は何冊くらい所蔵しているのかと問われて、「あなた方の2冊が使えるなら、それで2471冊になる」とその蔵書数を答えている。

この、「重要な形相を完璧かつ決定的に扱ったもの」、という表現にも気を惹かれるが、その2500冊たらずの冊数にもたいそう興味をおぼえる。それは、ひとが一生かかって読みうる本の数に関係した、ある「理想」の書物の数かもしれない。またはそのようにひとが読むということなどとは関わりのない、世界のある模型としての数であるのかもしれない。

これまで、たとえば「理想の図書館」というかたちで古今東西の書物を編纂物や目録、収蔵書として“封じ込め”ようとする試みはいくつかあった。古くは70万巻ものパピルスの子本を蒐集し『ピクナス』という目録を編纂したといわれるアレクサンドリア図書館。それは世界のすべてにむけての強い意志であったろう。がそれもシーザーとポンペイウスとの戦いのなか大半が炎上してしまった。そのアレクサンドリア図書館の復興がいま、エジプト政府の要請、国連開発計画（UNDP）の財政援助を得てユネスコの計画ですすめられている。

ウンベルト・エーコ原作で映画化された『薔薇の名前』³⁾の舞台である修道院の図書館はある世界の範型としての収蔵であった。写本、飾り文字、細密画などによる書物製作の場でもあったこの図書館では「範型」の収蔵だけでなく字義通りの、封じこめ・保管ということも大きな役まわりのひとつであった。

さらに19世紀の末には、デザイナーでかつ17、18世紀絵画の蒐集家でもあったジャック・ドゥーセ——かれはレースやサテン・シルクなどその素材にたいする趣味のよさと良い仕事ぶりにより女優や王室のひとびとに愛好されたのだが——アンドレ・プルトンとかれから紹介を受けたルイ・アラゴンに、ドゥーセ図書館充実のため購入図書のリストを作成する仕事を依頼した。そのリストには、カント、ライプニッツ、マラルメ、ランボー、リラダン、サドらの名前があがっていたといわれるが、これもかれらによる世界反映の所産であったとい

えようか。

これらはいずれも書物として対象化された世界の〈すべて〉を、そしてまたそれを厳選して編纂し蒐集することで世界を映し出そうとする試みであった。さらにまた、そうした集積や目録化とは別に、それらの書物群を「分けてわかる」ための分類や、書物群という迷宮を分け入って到達するための索引などの手だても、原初的にはこうした、映された世界を整序し手探りするための技法であったということもあわせて言っておこうと思う。

さて、世界を書物でもって語らせるという方法には大きくふたつある。ひとつは、〈すべて〉に向かう意志とでもいうべきもので、網羅性をもって世界に到達しようとするものである。具体的には世界書誌や全国書誌などの類で、大きな大学図書館などそうした意志を多かれ少なかれ内に含みもっているといえよう。のちに述べるオトレラによる1200万枚にもおよぶカードを持つ世界書誌学会などの世界宮殿の活動はその象徴的なものである。

もうひとつは、世界を模型構造として見ること、つまり書物を手だてとしてミニアチュールに世界を見立てるというものである。小さく細密的に精選し厳選して書物群を目録として閉じこめ、封じこめて世界を映そうとするものである。各種の名著目録や、のちに述べる知的協力国際委員会の「著名図書 (notable books)」などがそれにあたる。

とはいえ現実の図書館や歴史に生きてきた図書館、その収蔵書や目録がこのどちらかであるというわけではもちろんない。多くはこのふたつの意志の間のどこかに位置している。しかしながら、集積され編纂され目録化された図書群は、そのように世界を映し出し、それぞれの時代を反映し、世界のミニアチュールとしての鏡であることの契機を内に含みもっているということは言うてよいだろう。

世界を日本という〈世界〉におきかえてみると、日本を映す書物（の群れ）とは日本における図書目録や個人の蔵書目録の類であった。詳述する余裕はないが、いくつか歴史にそってあげてみる。

藤原佐世が勅命を奉じて編纂した『日本国見在書目録』（9世紀末）、これは日本に伝存の漢籍目録であり、日本を映す図書目録とはいえぬかもしれぬが、漢籍をつうじて海外中国の文化を吸収・利用して権力を保持した勢力を示すという意味では逆に一層その時代の日本を映していたともいえよう。またほかに国書の目録としては、分類の範にもなったといわれる『本朝書籍目録』があり、それは13世紀の終りに編纂された。

近世にはいつから江戸幕府書物奉行の林復斎らは四庫分類により紅葉山文庫の漢籍を整理し『重訂御書籍目録』を編纂した。また塙保己一は幕府に請願して民間の国学研究機関である和学講談所を設立し、〈日本〉の書物のある体系である『群書類従』編纂のため各地の典籍を収集し書写させて収蔵していった。『和学講談所蔵書目録』はその蔵書目録である。

さらにこの時代には武士、町人、僧侶を問わず数多くの個人の蔵書家が登場した。塙の『群書類従』編纂を助け、みずからも類書『古今要覧稿』を著わした幕府の奥右筆屋代弘賢は不忍文庫3棟に儲蔵した書物は5万卷といい『不忍文庫書目』をもった。ほかに江戸時代の個人の蔵書家として近藤守重の擁書城、小山田与清の擁書楼および『松屋蔵書目録』、狩谷桼斎の書裳文庫、そして和漢書の解題書である『群書一覽』を著わした尾崎雅嘉など、数

表 1

日本名著解題 高須芳次郎 誠文堂 1928
名著解題大辞典 太陽堂編輯部編 太陽堂 1931
人文科学の名著 淡野安太郎編 毎日新聞社 1957
日本の名著 毎日新聞社編 毎日新聞社 1976 (中高の教科書を参考に古典56点・現代78点)
世界名著大事典 平凡社 1960—
近代日本名著解題 岡野他家夫 有明書店 1962
日本の名著 近代の思想 桑原武夫編 中央公論社 1962 (戦前の、文学を除いた哲学・政治経済社会・歴史・文学論など50点)
日本近代の名著—その人と時代 エコノミスト編集部編 毎日新聞社 1966 (日本近代の歩みを50の名著で示す)
近代日本名著と文献 岡野他家夫 有明書店 1967
現代人のための名著 会田雄次ほか 講談社 1968 (19世紀から現代までの文芸作品を除く101点。翻訳も含む)
名著の履歴書—80人の編集者の回想 日本エディタースクール出版部 1971 (昭和21年から28年までの85冊)
日本の名著名言事典 紀田順一郎 講談社 1987
一冊で日本の名著100冊を読む 正・続 酒井蔵人 友人社 1992 文芸作品各100点
名著の伝記 紀田順一郎 東京堂出版 1988 叢書・事典や単行本の伝記16点

多くの蔵書家はその時代のなにがしかの世界を書物に対象化し収蔵につとめた。それらは蔵書の集積や目録という形態によってだけでなく、たとえば、塙保己一の和学講談所の「目録」や『群書類従』編輯にあたっての国書の「分類」、尾崎雅嘉の『群書一覽』の「分類」、さらに小山田与清の群書搜索目録における書物の世界に分け入る方法など、間接的ではあるが蔵書や目録としての〈日本〉の表出とあい通じるものがあると思う。

このように収蔵書や目録として日本は映されてきたわけだが、そのひとつの極は、くすべて〉に向かうことで日本を表現しようとする日本の書誌作成責任機関＝国立国会図書館（帝国図書館の時代も含めて）の全国書誌である。一方、冒頭に述べたようなミニアチュールに日本を見立てて目録化する試みのひとつは、日本の名著目録の類である。日本を読むため、また日本を知るために定評のある書物を選定すること、いわば日本を目録として封じこめる試みのひとつである。身近で参照できたものを示せば表1のようになる。

以上、日本における書物の収蔵や目録のことを述べてきたが、それらは特に外国に示すということを意識して収集され編纂されたものではない。もちろんそれらは必要にかられて外国人が参照し、利用してきた過程はあるだろう。しかしながら当初より外国人の利用を念頭において集積されたわけではなかったし、外国にたいし日本を表出することを目的とした目録として〈日本〉を封じこめたわけでもない。本稿で述べようとするのは、こうした目録とは別に、外国や外国人に対して日本を表出する目的で編纂されまた外国人の利用を前提にして集積された日本語資料の目録のことであり、その源流をなす目録のことである。ここではそれを〈ニッポン図書目録〉と呼ぶことにしたい。

表 2

1926	Commission Nationale de Coopération Intellectuelle du Japon (知的協力国際委員会日本国内委員会), Bibliographie Japonaise, concernant l'histoire nationale depuis les origines jusqu'à la fin de l'époque Tokugawa. Principaux ouvrages parus en 1924, 1925 et 1926.
1930	Commission Nationale de Coopération Intellectuelle du Japon (知的協力国際委員会日本国内委員会), Bibliographie Japonaise, Principaux ouvrages parus en 1927, 1928 et 1929. ほかに Bibliographie Japonaise (Bibliographie comprenant les ouvrages d'études de l'époque Meiji). も出版された。
1935	国際文化振興会, Introduction to Contemporary Japanese Literature『日本現代文学解題』
1935	国際文化振興会, K. B. S. Bibliographical Register of Important Works Written in Japanese on Japan and the Far East, Published during the Year 1932. 以後1936年度分まで刊行。
1950	Beardsley, Richard K. Bibliographic Materials in the Japanese Language on Far Eastern Archeology and Ethnology. University of Michigan Press.
1954	Hall, John W. Japanese History: A Guide to Japanese Reference and Research Materials. (No. 4 of the Bibliographical Series of the Center for Japanese Studies.) University of Michigan Press.
1956	Hall, Robert B. Japanese Geography: A Guide to Japanese Reference and Research Materials (No. 6 of the Bibliographical Series of the Center for Japanese Studies.) University of Michigan Press. これは1978年にGreenwood Press から復刻された。
1971	国際文化振興会, K. B. S. Bibliography of Standard Reference Books for Japanese Studies with Descriptive Notes Vol. 1 generalia 10まで
1974	国際交流基金, An Introductory Bibliography for Japanese Studies. vol. 1, part 1 Social Science; 1969—72 (1974), part 2 Humanities; 1970—73 (1975) 以下 vol. 3 まで
1986	福田直美, Japanese History: A Guide to Survey Histories Part 2 Literature『日本文学史文献解題』. Center for Japanese Studies, University of Michigan.
1989	北京日本学研究中心,『図書資料部蔵書目録 1985年—1989年』北京日本学研究中心 (北京外国語学院)
1992	北京日本学研究中心,『図書資料館蔵書目録 1989年—1991年』北京日本学研究中心 (北京外国語学院)

(2) 〈ニッポン図書目録〉の源流

外国に向けての〈ニッポン図書目録〉編纂の原初的な志向は先に述べたものと同じである。つまりそれらは、第1に、外国人の研究者・利用者を対象にして、書物を系統的・体系的また網羅的に、時にはそれを主題に切って提供するものである。日本研究のための図書解題、日本研究のための基本図書目録、日本文学史文献解題のようなもので、そのうちには主題ごとに、またグレイドごとに、〈すべて〉に向かう意志を含みもっているといえよう。第2には、日本をよく示し日本を代表する書物の目録、精選された名著目録の類である。第3に、歴史的な状況や社会的な要請に強いられ、より一層〈日本〉を顕現するため収集され目録化されたものである。これらを簡単な年表にして示せば表2のようになる。

本稿では、先の第2にあたるものとして、知的協力国際委員会の編纂した“Bibliographie Japonaise (ニッポン著名図書目録)”を、そして第3として「対支文化事業」の一環で北京に設立された北京近代科学図書館の収蔵書・図書目録をとりあげてみたい。両者ともに、海外を意識したニッポン図書目録としては最初期のものであるし、前者は第一次世界大戦前の、オトレらによる世界書誌学会との関わりや国際連盟の委員会の流れのなかにあり、それ

ゆえそれは、著名図書目録ではあるがその内には理念としての〈世界〉や思想としての〈すべて〉が内包されていたこと、後者は植民地中国に設立された日本図書館であり状況に強いられまた自らの意志をも前面に立てて、より一層日本を顕現し図書の集積や目録の編成につとめたという理由による。以下それぞれについて述べていく。

ア *Bibliographie Japonaise* (ニッポン著名図書目録)

知的協力国際委員会の日本国内委員会により編纂されたこのニッポン図書目録は正式には3冊ある。明治時代に出版されたものから選んだ *Bibliographie Japonaise* (*Bibliographie comprenant les ouvrages d'études de l'époque Meiji*)、開闢以来江戸時代までの図書および1924、25、26年の「著名図書」を集めた *Bibliographie Japonaise, concernant l'histoire nationale depuis les origines jusqu'à la fin de l'époque Tokugawa* と *Principaux ouvrages parus en 1924, 1925 et 1926*、そして1927、28、29年の図書からなる *Bibliographie Japonaise, Principaux ouvrages parus en 1927, 1928 et 1929* の3冊である。この目録の編纂を意図したのは、第一次世界大戦後に国際連盟第24条の付設機関設置および情報収集・頒布・その援助という条項を根拠に創設された知的協力国際委員会で、その設立はオトレとともに国際的文化活動をおこなってきたラ・フォンテーヌが1920年の連盟総会において設立提起の演説をしたことがその契機である。これらオトレやラ・フォンテーヌによる国際的学術活動およびかれらの国際連盟との折衝⁵⁾という長い前史については別稿⁶⁾を用意するのでここではその流れだけを確認しておきたい。

オトレ (Paul Marie Ghislain Otlet, 1868—1944) はブリュッセル生れ、ルーヴァン大学卒業後弁護士としてピカルル法律事務所に入所した。所長のピカルルはベルギーの学者たちと協力して1889年末に社会・政治学会 (Société des Etudes Sociales et Politiques) を設立したが、その学会には書誌部会が付設されておりその部会長がラ・フォンテーヌであった。この出会いによりふたりは、共に手をたずさえて国際文化活動や書誌作成の営為をくりひろげていくのである。

ラ・フォンテーヌ (Henri La Fontaine, 1854—1943) もまた法律家で1894年には社会党上院議員となり国際平和運動に大きな力を発揮し、ベルギー平和協会を設立した。それが国際連盟の基礎理念となったといわれる。1913年にはこうした国際活動の功績を認められてノーベル平和賞を受賞している。

ふたりはさきの社会・政治学会およびその書誌部会を基礎に書誌や索引などの活動を国際的な規模で展開していく。そのひとつの象徴はのちに世界書誌の原形となる図書カードで、1895年には20万枚に達していた。また資料を組織化し、編成するためにオトレらはメルビル・デューイの十進分類法を知ることとなり、デューイの許可を得てフランス語に翻訳し研究したりする。さらにふたりは、分類や世界書誌 (Répertoire Bibliographique Universel=Universal Bibliographic Repertory) の理念を世界に広めるため、1895年9月に国際会議の開催を企画する。ベルギー政府も公的な援助を与えたこの会議で、世界書誌の発展とその研究のため国際書誌学会 (Institut International de Bibliographie=IIB) を設立することを決定し、また、IIB での決定を実行するための機関として、書誌のための国際事務所

(the International office of Bibliography) を設けて作業にとりかかること、その構成は世界書誌編成に関心を持つ国家・行政機関・科学協会・著述家などとするなどを決議した。

1900年のパリ万国博覧会開催時にはそれにあわせて数多くの世界会議が持たれたというが、IIB の第3回大会もそうして開催された会議のひとつであった。会議への公式参加国は、ベルギー・カナダ・デンマーク・アメリカ・フランスなど10か国で、デュイはアメリカを代表して参加した。会議では、世界書誌や個別書誌について論議がなされ、オトレはこの会議で、全国書誌・専門書誌・選択書誌・分析書誌・批判書誌・包括書誌などがそれぞれその特性を発揮しシステムティックに相互の関連がつけられるような書誌の試みを提案、それが世界書誌カード目録 (RBU) であると会議を総括した。

1910年にはベルギー本国で万国博が開催された。これに合わせてオトレらは5月に国際学会連合 (Union of International Associations=UIA) 世界大会を開き規約を定めた。この会議には13か国、137の団体が参加した。そして12の展示がなされたが、ドキュメンテーションのセクションでも IIB の活動が展覧された。オトレらは、こうした展覧がかれらの構想や理念について人々の理解を得るのによい方法であると確信し、閉会の宴席ではこの会議の議長により世界博物館 (the International Museum) の設立が提案されている。これはのちに世界書誌を含む各種国際的な施設を統合した世界宮殿 (Palais Mondial) の原形となるものであった。この博物館は1913年までに、サンカントネール宮殿 (Palais du Cinquantenaire) のなかに16室を確保し、世界各国についての文化や民族の比較研究ができるようにと標本や資料を展示した。

こうした活動にはばく大な資金が必要であるが、オトレやラ・フォンテーヌはこの事業を手弁当で手がけ、さらにラ・フォンテーヌは受賞したノーベル賞の賞金をつぎこんで事業を持続させていたという。とはいえそれらはなんといっても善意と熱意に支えられた個人の事業であり、資金や組織・統制面で限界や困難さが露呈してくるのも無理からぬところであった。UIA など国際書誌活動の資金的な解決のためにも、またそれを世界的に認知させていくためにも、その将来的展望と方向性を定める必要にせまられてきた。

第一次世界大戦勃発によりベルギーはドイツに侵攻され、オトレはフランスからスイスへ、ラ・フォンテーヌはアメリカへと亡命した。戦後かれらはベルギーにもどり、1918年の国際連盟の創設を機に、かれらの活動を新たな世界秩序のなかに位置付けるべく連盟にたいして積極的なアプローチをかけていく。つまり、かれらの活動を連盟の活動の一環にしようと試みたのである。オトレらと連盟との折衝はかなり激しいもので、各国連合という連盟の組織的な問題や個人的な思惑もからんで難航した。以下、「著名図書」や目録編纂にかかわる点を中心に述べていく。

オトレやラ・フォンテーヌも参加した1919年のパリ講和会議において、ベルギーの全権大使ポール・ハイマンスが、連盟は国際知的関係の機関を確立することを誓約した条項をつくわえることを提案したが論議されずその提案は撤回されていた。その後オトレらは連盟の機関としての「世界知的センターについて」といった論文を発表しその実現に力をそそいだ。4月になりパリ講和会議では連盟は規約を採択しエリック・ドリュモンドが連盟の事務

局長に、事務次長にはジャン・モネー、新渡戸⁷⁾稲造およびアンジロッチがあたった。新渡戸は国際事務局部の部長を兼ねていた。

オトレらの主張の根拠となっていたのは、連盟規約24条の設置条項で、一般条約による既設の国際事務局は当事国の承諾があれば連盟の指揮下に属させることができる、というものであった。たとえば国際労働機関などとおなじような機関の設置を期待し、UIAなどを世界的ドキュメンテーション事業の中心的機関として位置づけたいと考えていたのである。この交渉の相手は事務局のドリュモンドとのちに知的協力国際委員会の部長となる新渡戸であった。

1920年11月15日ジュネーブで開かれた国際連盟第1回総会でベルギー代表であったラ・フォンテーヌは、第2委員会の発表者として発言の機会を得た。そこでかれは年来の国際的文化活動の理想・理念を語り、かれらの活動を基礎とした知的作業の国際機関 (international organization of intellectual work) の設立を提起した。知的労働の組織化ということばを知的労働の労働組合への組織化と誤解するメンバーもあったが、かれの提案は拍手喝采でむかえられた。

しかしながら事務局の新渡戸らは慎重な構えで、3月の連盟理事会ではスペインのクイノネス・ドゥ・レオンがUIAと連盟との関連を報告、論議のすえ事務局でさらに研究することとなった。それを受けて事務局の新渡戸はオトレにたいし、現時点では時期尚早であり世界にその理念をひろめるのに3、4年待つべきであるとの趣旨の書簡をおくり、理事会の決定をつたえた。翌21年9月、フランス代表レオン・ブルジョアにより審議委員会を持つことが提案され、22年5月これらの経過をふまえて知的協力国際委員会⁸⁾ (International Committee on Intellectual Co-operation) のメンバーが任命され委員会が発足したのである。

これ以後も、オトレらのUIAやIIBと連盟・知的協力国際委員会との間にはまだまだ激しい綱引きがあったのだが、ここでは、この知的協力国際委員会の所産である『著名図書目録』には、かれらのそれまでの世界宮殿を拠点とした世界書誌への夢と理想がこのように深く刻印されているのだ、ということを確認するにとどめたいと思う。

この知的協力国際委員会のメンバーは12名であった。かれらはその国を代表するものではなく、世界的に著名な学者・哲学者など学識経験者からえらばれた。アンリ・ベルグソン (フランス学士院教授・哲学)、キューリー・スクロドースカ夫人 (パリ大学教授・物理学)、アルベルト・アインシュタイン (ベルリン大学教授・物理学)、ギルベルト・マレー (オックスフォード大学教授・ギリシャ哲学)、バンネルジア (カルカット大学教授・経済学)、ボンヌヴィー (クリスティニア大学教授・物理学)、カストロ (リオデジャネイロ大学教授・薬学)、ジュリー・デストレー (ベルギー前文部大臣)、ハール (マント・ウルソン研究所所長・イギリス)、レイノール (ベルヌ大学教授・フランス文学)、ルツフィニ (チューレン大学教授・教会法学)、ケヴェド (マドリッド電気工業研究所所長) らで、部長は新渡戸稲造であった。オトレやラ・フォンテーヌは選ばれずベルギーからはジュリー・デストレーであった。この予想外の任命には新渡戸もショックであったと述べている。

この委員会の第1回会議は8月に開催された。国際大学・国際図書館・書誌の国際的な組

織化など、オトレらの世界宮殿の活動と関連する多くの議題が討議された。ベルギーのデストレーは IIB の活動をとり上げ、他のメンバーは統一的分類の必要性に言及した。書誌についてはカレントなものと遡及的なものとにわけられ、とりわけ前者の必要性が強調された。そして委員会は、これら書誌や目録についての問題を検討するための小委員会の設置を決め、ベルグソンを委員長とした。そのメンバーはデストレー、キューリー夫人らで、ほかに4人の専門家が選ばれ、そのうち3人は図書館員であった。著名図書目録は主としてこの小委員会で検討されることとなる。

第1回会議での研究事項を整理してまとめてみるとつぎのようになる。¹⁰⁾ 1. 世界の学者の生活状態を調査すること、2. 学者が生活に困窮している国にたいして救済策を講じること、このふたつはとりわけ第一次世界大戦で甚大な被害を蒙った国にたいする援助・協力という性格のものである。3. 著作権および特許権にかんする研究、4. 世界の大学間の連絡協力にかんして、5. 国際的図書目録の編纂、であった。この「国際的図書目録の編纂」が先に述べた小委員会で検討されたのである。

23年5月、オトレを迎えて世界宮殿で開かれた小委員会での協議の結果、IIB の先駆的な仕事は可能なかぎり利用されるべきであること、世界書誌（カード目録による）の提供というサービスを小委員会は考慮しているが現在、統一的な分類システムの提示や主題目録の確立はまだ時期尚早であり、ただ著者名のアルファベット順のカード目録については IIB で蓄積されたものから選ばれるべきであること、そして知的協力国際委員会はこの研究を連盟の援助のもとになすべきことなどが結論づけられている。

7月の知的協力国際委員会でこの結論は承認され（IIB でも後の世界会議のうちに承認の決議がなされている）、当面、国際図書館の設立や世界各国の全知識領域にかかわる書誌関連機関や逐次刊行物のリストである『書誌索引（Index Bibliographicus）』の編纂が確認された。後者の企画は9月の総会でただちに承認され、その作業には可能なかぎり IIB の仕事を利用することが決定された。この『図書索引（Index Bibliographicus）』は、世界の図書目録および世界の逐次刊行物の一覧表で〈すべて〉の図書の網羅にむけての枠組みの作業であるといえる。¹¹⁾ それは、25年に出版された。

また世界各国の図書館の蔵書を組織的に分類するための各国図書館の連携も研究され、それは図書館専門家委員会の招集として実行された。さらに各分野の世界的目録の発行については、まず物理学・生物学に関する目録の刊行が検討された。これら刊行物の国際的流通のため1886年のブリュッセルの出版物交換の条約を改正するため会議を開催することなども確認され、協議にはいった。

委員会ではこれらの作業をすすめるため、24年に各国に質問状をだし、世界に重要な図書の目録の編纂にふみだした。25年7月には美術および文芸の小委員会も設けられ、文学作品の翻訳問題など独自の活動が活発に展開されていく。また26年には世界各国の博物館の出品交換・写真の複写などのため国際博物館事務局の設置も提案され、多分野の活動が展開された。¹²⁾ あわせてつけくわえておけば、1923年9月の関東大震災に対し第4回連盟総会の決議に基づき帝国大学図書館の復興援助のため世界各国に図書の寄贈の檄を飛ばしたのもこの委

員会であった。

知的協力国際委員会のメンバーは26年まで議長をベルグソン（フランス学士院哲学教授）がつとめたが、同年、ローレンツ（オランダ・ライデン大学教授・物理学）と交代した。この時点での委員会は4つの小委員会からなっていた。大学連絡に関する小委員会、科学および書目に関する小委員会、文学および美術に関する小委員会（25年7月設置）、知的所有権に関する小委員会の4委員会である。先の委員がそれぞれの担当にあたっているがほかに文学・美術の小委員会にはポール・ヴァレリー（フランス）、カザレス（スペイン）らが委員となり長く活発な活動を展開した。¹³⁾なおこの時期の科学および書目に関する小委員会のメンバーは、ローレンツ、ボンヌヴィ、キューリー夫人、パウルヴェ、アインシュタイン、ボースである。

組織編成についてももう少しのべておく。知的協力国際委員会の予算は不足がちで23年9月の総会でもベルグソンはその窮状を訴えたが、ベルグソンの懇請の甲斐あって氏の選出国であるフランス政府は、24年6月パリに知的協力国際協会（International Institute of Intellectual Co-operation）¹⁴⁾の設立および、年間300ポンドの支給を申し出た。この国際センターの申し出は、資金不足に悩んでいた連盟にとっては朗報ではあったが、UIAを知的協力国際委員会の事務局に、と考えていたオトレやラ・フォンテーヌにとっては大変な強敵であった。オトレらは、ちょうど開催することになっていたUIAの世界会議終了まで決定を延期してくれるよう連盟に依頼した。結局、会議終了の9月9日、連盟は基本的にはフランスの申し出を受け入れると決定した。ただ総会では知的協力国際委員会に、このパリの協会がUIAやIOB（the International office of Bibliography）などの既存の団体と協力関係を持つようところがけねばならない、とオトレらを配慮した結論をつけくわえている。

この、パリに本拠を持つ知的協力国際協会は、26年1月に開会式を举行し実務にとりかかった。この協会は、知的協力国際委員会の監督下にある事務局で、委員会の決議を実行するための執行機関であった。会長はルシエール（フランス視学総長）、役員はパウルヴェ、デストレ、ローレンツ、マレー、レイノール、ルツフィニで、美術部・大学部・文学部・情報部・科学部・法律部・総務部からなり、それぞれの部長は各国の学識経験者が選任されていた。¹⁵⁾この部は27年に再編されたが、本稿でのべようとしている「著名目録」についての担当部局は情報部であった。

このように、世界書誌の作成や国際的文化活動などオトレやラ・フォンテーヌの世界宮殿の理想や理念は紆余曲折をへながらも連盟の知的協力国際委員会や小委員会の活動のなかに生かされることにはなった。しかしながらそれはオトレらの夢見ていた世界の一元的・中央集権的な書誌活動ではなく、各国で構成された国際連盟という連合的な活動であった。つまり世界書誌という概念は、その膨大さ・困難性ともあいまって、世界の〈すべて〉の図書を一元的・網羅的・体系的に編纂するという方向から（その意志を確実に内にのこしながら）、まず「書誌の書誌」を編纂すること、入手にいたる手だてを明示すること、体系をつくるための手段を研究することといった、分割的で相互の協力的な方法に変化していくことになった。具体的には、『図書索引（Index Bibliographicus）』の全世界の逐次刊行物の一覧や

「図書目録の目録」の編纂であり、分野ごとの目録（たとえば物理学にかんする目録）編成であり、世界各国の蔵書を組織的・体系的に分類するための分類法の研究であり、各国図書館との相互の連絡のための専門家会議であり、そして各国の著名図書の目録といったかたちで結実していくのである。

このように19世紀から20世紀という世紀の変わり目は、書誌、とりわけ大規模な世界書誌や雑誌類の索引などは、個人の営為から専門的・組織的な作業へと移行していく時期ではあった。だからこそオトレらのこうした個人の発意による構想は、一層理想に燃え、思い入れも倍加されたのであった。オトレらと国際連盟との折衝は、したがって、書誌の編成についても、個人対組織というかたちで現われ、歴史の趨勢からみてもオトレらにとっては分の悪いものであったといえようか。

この、いわば世界的一元性から各国相互の協力による分散化の視点の移動は、知的協力国際委員会においては、委員会各国支部ともいべき国内委員会の設立（National Committee on Intellectual Co-operation）の設立という形になってあらわれる。これは、もともと、第一次世界大戦に被害を受けた疲弊国にたいする調査とその援助を目的に成立させたもので、オーストリア、ブルガリア、エストニア、オランダなどがまず国内委員会を設置した。国内委員会のかたちは各国ごとさまざまで、委員制や、既設の機関の利用、大学や学士院を指定するものなどいろいろであった。23年8月の第2回知的協力国際委員会においては疲弊国の調査・援助のためだけでなく、国際事業の実施・実現のため、つまり図書の交換貸借、図書目録の作成頒布、連盟思想の普及などの実施のため、他の各国にも国内委員会の設置をよびかけ、フランス、ベルギー、イタリア、イギリスなどの諸国が次々に国内委員会を設立した。

日本において国内委員会の創設が具体化したのは、1926年のことである。¹⁷⁾当初、その組織として、帝国学士院や国際連盟協会などの案もあったが、前者はいかに官学的色彩が濃いこと、美術・音楽分野を欠いていること、後者にしても、学会や音楽・美術団体との関わりが少ないことの理由で、新たに団体を設立することになったようである。そして1926年5月30日、東京丸の内銀行倶楽部において学芸（知的）協力国内委員会の発会式および相談会がもたれた。出席者は山田三良（帝国学士院・帝国大学法科大学教授）、姉崎正治（帝国学士院・帝国大学文科大学教授）、宮島幹之助（衆議院議員・北里研究所理事兼部長）、小村欣一（侯爵）、栗屋謙（文部省専門学務局長）、加藤外松（連盟協会主事）、菊沢季磨（文部省専門学務局学術課長）、栗山茂（外務省条約局第三課長）であった。

会は、栗山、山田の成立事情の説明から始まった。それによると、事前に各方面と折衝した結果、帝国学士院が主となり連盟協会が事務局的任务を持つこととなった、とのことである。国内委員会の委員については、先の山田・姉崎・宮島・小村・栗屋および長岡春一の6名が決り、山田が委員長となった。幹事は加藤（連盟協会との折衝）、菊沢（文部省との折衝）、栗山（外務省との折衝）とし、事務局は芝公園の協調会館国際連盟協业内学芸協力委員会とした。そして内部での分担については当面、大学連絡部（山田）、学術研究部（宮島）、文学美術部（姉崎）、演芸音楽部（小村）の4部制で運営することとしている。さらに

知的協力国際委員会に対しわが国からも委員をだすこと、外務大臣が適任者を推薦すること（たとえば田中館愛橘氏）を希望するとの決議も採択された。なおこの決議は、26年12月7日の連盟理事会で田中館が委員に任命されることで実現をみた。

さて、国際委員会で懸案となっていた各国の著名図書目録についてであるが、この日本国内委員会創設の会合でも話題となり、既存のものにはそれにあたるものがないということで委員会で作成を引き受けるのは容易でないとし、菊沢が関係筋にあたることとした。さらに27年5月14日、新渡戸稲造の帰国歓迎会をかねての委員会で、訳語の統一や欧文法典起草委員会の役員の決定のほかに、著名図書目録¹⁸⁾については、ただちに編纂にかかること、姉崎正治の助言・指導により赤松秀景が執筆することをとりきめている。

こうして1928年4月10日にまず、日本の開闢から江戸時代の終わりまでの国史にかんする図書の目録および1924、25、26年の間に出版された哲学・歴史・文学・考古学・人類学・美術関連の「著名出版物」の目録が出版されたのである。この著名目録は知的協力国際委員会のほか各国の学術団体、図書館などへ頒布された。この作業は継続して続けられ1928年には、27年分が作成されている。

この著名目録は各国でも編纂され、28年7月の『国際知識』²⁰⁾の報告によれば、1924年版は20か国、25年版は26か国、26年版は33か国で著名図書の刊行があったとされている。また、各国が著名図書として推薦する数は各国の出版事情により制限されており、40点、20点、10点、5点の四段階にわかれており、日本はこのうち20点のランクに位置していたようである。

1929年7月、各国の国内委員会代表者による初めての会議がジュネーヴの連盟事務局で開催され、日本から国内委員長の山田三良が参加した。この会議での山田の発言から、この時期の日本委員会の活動の状況をうかがうことができると思われるので少し記しておく。山田の報告によれば会議の参加者はドイツ、オーストリア、ベルギーなど28か国で、知的協力国際委員会部長は新渡戸更迭のあとの連盟事務次長ドフル・フェロンスであった。山田は日本の国内委員会の組織等を説明したあとその事業や活動について、国際委員会やパリ国際協会の要請にたいしてわが国は忠実に任務をはたしていることを述べたあと、28年以来編纂している『英文日本美術年鑑』²¹⁾をとり上げ、それは「東西文化の融和接近に資せんが為」に刊行しているもので日本の美術界・美術教育・展覧会・博物館・国宝についての情報や年度内の著名な作品や名作が紹介される、と説明している。この年鑑については続いて開かれた国際委員会の冒頭で議長のギルバート・マレーから、委員会は世界各国の文化生活すべての情報を収集しなければならぬがこの日本の『英文日本美術年鑑』はその好例である、と称賛を受けた。

さらに山田は、国際委員会にたいして各国の文化にかんする資料と報告を収載した『国際文化年鑑』の創刊を提案した。それは、その時点で発行されつつあった各国の「著名目録」を更に拡充して主要出版物解題書目とし、文学・美術・演劇・映画・音楽などの人文科学、自然科学、教育・宗教・政治・経済・国際関係にかんする事項について5万字以内で提出する、といった内容のものであった。この提案について議長は、国際委員会の「文学および美

表3 『群書一覽』による
分類点数

分 類	点 数
国史	16
神書	1
雑史	13(12)
記録	4
有職	11(2)
氏族	2(2)
字書	3(2)
往来、法帖	なし
物語	2
草子、日記	
和文、紀行	なし
選集	1

分 類	点 数
私撰、家集、歌合、 百首、千首、類題、 和歌雑、撰歌、 歌学、詩文、医書	なし
教訓	1
釈書、管絃	なし
地理	1
名所、随筆	なし
雑書	5(3)
群書類従	1

注) () 内数字は『群書一
覧』に採録されず、推定
で分類した点数

術小委員会」でも同様の問題が提起されたが当面各国が国内年鑑を発刊することと決定しており議題には供しないと報告、これにたいして山田は、国内委員会への国内年鑑刊行の勧告では意味があまりなく国際的な年鑑であってこそ意義ある提案であると反論し、結局「国際年鑑の発行を可能ならしむべき方法において博物館、図書館その他の年鑑等文化的な生活に関する情報

の発行を尽力すること」との決議となった。これら山田の報告から察するに日本の委員会の活動は他国に比べてもかなり活発で『国際知識』の「本協会ニュース」の日誌をみても例会など頻繁におこなわれていた。

また、この委員会では、ポーランドの委員から現在パリの国際協会が実施している「著名目録」についてその編纂が不完全であり實際上問題があるので編纂方法を修正すべしとの提案も決議され、この著名図書目録の編纂について不満がだされた、と山田は報告している。この世界の著名目録は数年にわたって刊行されてきたが、選択の方法や編纂方法の困難さのゆえか、1929年版の刊行をもって中止ということになった。

以下、本邦初のニッポン図書目録ともいうべき「著名目録」の内容についてみていく。この目録は3冊4部からなっている。まず、日本の開闢以来江戸時代までの図書を集めたものと1924、25、26年の「著名目録」を集めた *Bibliographie Japonaise, concernant l'histoire nationale depuis les origines jusqu'à la fin de l'époque Tokugawa*、および *Principaux ouvrages parus en 1924, 1925 et 1926* で、1928年4月に刊行されている。前半の古典の著名目録の注によると、この目録は日本の国史に関する概括的な参考資料を提供するもので、リストには日本の歴史的起源を示すと思われる主要な著作だけを収録、より正確に言えば1868年以降に翻刻・再版されたものを収めている、タイトルはそれが理解できる場合は字義通り、そうでない場合は意味を与えて翻訳した、とある。目録は、書名の読み、日本語書名、書名のフランス語訳、巻数、成立年や著者・時代など数行のフランス語の解題からなっている。

目録に収録された作品は、『古事記』『日本書紀』『続日本紀』など国史からはじまり『新撰姓氏録』『万葉集』『愚管抄』『吾妻鏡』『群書類従』『公卿補任』『和名類聚抄』『俚言集覧』『伊呂波字類抄』『延喜式』『職原抄』『貞永式目』『公事根源』『江家次第』の文学・字・法律・制度など合わせて84点である。これら古典の内容を概観するため享和2年(1802)に刊行された尾崎雅嘉『群書一覽』の分類で点数を示せば表3のようになる。

これら古典の「著名目録」をみると、『古事記』『日本書紀』など国史類および『保元物

語』『平治物語』『源平盛衰記』『信長記』など雑史類のように歴史書が圧倒的である。歌集は『万葉集』くらいでいわゆる文学は物語が数点あるだけ、そして、家系・系図をしめす『新撰姓氏録』『尊卑分脈』、俗語字典や字典である『俚言集覧』『伊呂波字類抄』、制度・法令・有職などである『延喜式』『令義解』『貞永式目』『公事根源』『江家次第』など、姓氏・字書・有職など、今でいうレファレンスブックが目につく。これらは国史中心で文学が少ないのがさびしいが、とはいえ、日本をよく物語っているもの、日本を調べたり研究したりするのに役立つものを配慮した目録となっている。つまり外国人が日本を知ることのできる図書、外国の日本研究や調査に役立つ図書を選択したいわば<ニッポン図書目録>ということになるのか。

もうひとつ同じ冊子に収録されたもので1924、25、26年に刊行された哲学・歴史・文学・考古学・民族学・美術関係の図書からなる *Principaux ouvrages parus en 1924, 1925 et 1926* がある。これには、巻数・ページ・活字の号数も記されている。収録された著作は、1924年の宇井伯寿『印度哲学研究』、宇野哲人『儒学史』、内藤虎次郎『日本文化史研究』、鳥居龍蔵『日本周囲民族の原始宗教』、津田左右吉『神代史の研究』など10点、25年は田辺元『数理哲学研究』、松本亦太郎『知能心理学』、高木敏雄『日本神話伝説の研究』、姉崎正治『切支丹宗門の迫害と潜伏』、新村出『南蛮広記』、金田一京助『アイヌの研究』、三浦周行『続法制史の研究』、柳田国男『海南小記』など19点、26年は服部宇之吉『孔子及孔子教』、小金井良精『小類学研究』、穂積陳重『実名敬避俗研究』、沼田頼輔『日本紋章学』、田辺尚雄『日本音楽の研究』、平泉澄『中世に於ける精神生活』、伊波普猷『孤島苦の琉球史』、南方熊楠『南方随筆』など26点で、ほとんど専門学術書からなる。

ちなみに、大阪府立図書館の十進分類法でその分野別内訳をしめせば表4のようになる。

選択の作業にあたったのが赤松秀景、それを指導したのが姉崎正治であり、採録が学術書に傾くにしても文学書があまりに少ない。小説にいたっては1点もなく、文学・語学が3点というのはさびしい。哲学や史学を中心に、日本研究の書物だけでなく東洋研究に資する著作をも配慮して選んだようではある。専門分野の研究でそれぞれ基礎をなした人々の学術書著作としての著名図書というべきものであったといえる。

第2冊目は、1927、28、29年の著作からなる *Bibliographie Japonaise, Principaux ouvrages parus en 1927, 1928 et 1929, Philosophie, sociologie, éducation, histoire, littérature, linguistique, archéologie, folklore et beaux-arts.* で刊行は1930年5月であった。この目録では先のものとは比べて採録分野に変動があり、民族学という名辞が民俗学となり、また社会学、教育、

表4 1924、25、26年著名図書の分野別内訳
(大阪府立図書館分類による)

総記	3
宗教、哲学、教育	14 (4)
文学、詩学	12 (1)
歴史	14
政治、法律	4
経済、商業、社会	4
自然科学	4
工学、技術、工業	1
産業	0
芸術	3 (1)

() 内は所蔵しない図書の推定分類

表5 1927、28、29年著名図書の分野別内訳
(大阪府立図書館分類による)

総記	2
宗教、哲学、教育	13 (3)
文学、詩学	11
歴史	15 (4)
政治、法律	(1)
経済、商業、社会	10
自然科学	3
工学、技術、工業	1
産業	1
芸術	6 (1)

() 内は所蔵しない図書の推定分類

表6 明治期著名図書の分類別内訳
(『国立国会図書館所蔵明治期刊行図書目録』から)

			参考：目録の全収容点数	
総記	2点	1.4%	1144点	1.1%
哲学	32	22.6	6053	5.7
宗教	22(2)	16.9	8456	8.0
歴史	33	23.2	5115	4.8
地理、伝記	5	3.5	8974	8.4
社会科学、教育	11	7.8	26624	25.0
科学、医学	2	1.4	17033	16.0
芸術、諸芸	7	4.9	7632	7.2
語学	17(1)	12.7	8365	7.9
文学	8	5.6	16937	15.9
計	142	100	106333	100

言語学が付け加わっている。これは先の採録がいささか人文科学にかたよっていたこと、そしておりしも図書館界では、青年図書館員連盟が標準分類法の制定にかかり、1928年に試案として「和洋図書共用十進分類法案」を、翌29年「日本十進分類法」を発表するという時代の動きに反応したのかもしれない。ちなみにこの目録の作成に関わっていた姉崎は、東京帝国大学図書館館長であり日本図書館

協会の理事でもあった。

この目録には、委員会の名前で「はしがき」がかかれている。それは次のようである。

ここに提出する日本書誌は、東洋学のさまざまな部門に関しての主要な著作からなっている。哲学・歴史・文学・言語学・美術などの分野で1927、28、29の最近3年に刊行された著作からなり、それぞれの著作に簡単な説明を付した。これは完全ではないが、ある一定の範囲内で意義があり有用であること、つまり容易にそれを知ることができない人々にこのような目録を公けにし、日本における調査・研究の傾向を指し示すことができたらと願っている。この日本書誌は委員会により委託されて赤松秀景氏のご尽力で準備された。また姉崎正治博士には多忙のなか助言をくださり刊行を指導していただいた。感謝の意を表したい。

知的協力日本国内委員会東京 1930年5月

この目録で採録された著作は、1927年、矢吹慶輝『三階教の研究』、村上专精『仏教統一論』、梶尾祥雲『曼陀羅之研究』、桑原隲蔵編『東洋史説苑』、土屋喬雄『封建社会崩壊過程の研究』、藤村作『近世国文学序説』、小野武夫『日本村落史考』、藤田元春『日本民家史』など22点、28年には小川琢治『支那歴史地理研究』、新城新蔵『東洋天文学史研究』、本庄栄治郎『近世封建社会の研究』、芳賀矢一『日本文献学 文法論 歴史物語』、伊庭孝『日本音楽概論』、高野辰之『日本演劇の研究』、黒正巖『百姓一揆の研究』、幸田成友『日本経済史研究』など24点、29年には岡田正之『日本漢文学史』、高橋亨『李朝仏教』、京城帝国大学法文学会編『朝鮮文化の研究』、徳富猪一郎『維新回天史の研究』、石川謙『日本庶民教育史』、瀧川政次郎『日本社会史』、藤沢衛彦『明治風俗史』、日夏耿之介『明治大正詩史』、佐久間鼎『日本音声学』、折口信夫『古代研究 民俗学篇 国文学篇』、上田恭輔『支那陶磁の時代的研究』など25点である。

これについても分類ごとの内訳を示してみる(表5;前ページ)。

「はしがき」に、東洋学の分野を採録するとうたっているように日本に関してだけでなく中国・朝鮮にかんするものが数多く入っている。これは、日本において「支那学」や朝鮮についての研究がすすんでいたことを示しているだけでなく、東洋および東洋学に対する日本

の、誇示・自負の表われでもあったろうか。また経済・社会分野の著作も今回入っているが、これも大学での学部の再編成などにみられる学問の分化ということと関わっているのであろう。文学史や語学書は今回多く採録されているが、ここでも文学作品は紹介されていない。日本の文学が〈日本〉として外国に紹介されるにはまだ期が熟していないということなのかもしれない。

最後に、これは刊行年が不明であるが、明治時代に出版された図書からなる著名図書目録で、*Bibliographie Japonaise (Bibliographie comprenant les ouvrages d'études de l'époque Meiji)* がある。「注」には、特殊な研究に属するものは除き出版年順に配列した、とある。それぞれは、著者名・書名のローマ字読み、書名のフランス語訳、刊行年、活字の号数、著者・書名の日本語、そして数行のフランス語の解題からなっている。採録されたものは、1880年の渡辺修二郎『日本外交始末』、81年の田口卯吉『日本開化小史』、83年の清野勉『格致哲学緒論』、末松謙澄『希臘時代理学一斑』、とはじまり、藤田茂吉『文明東漸史』、島田三郎『開国始末』、花房義質『演劇通史』、勝安房『開国起源』、吉田東伍『日韓史断』、小中村清矩『歌舞音楽略史』、竹越与三郎『二千五百年史』、井上円了『外道哲学』、大槻文彦『広日本文典』、姉崎正治『印度宗教史考』、落合直文『新編仮名遣』、井上哲次郎『日本陽明学之哲学』、中江篤介『一年有半』、大西祝『論理学』、富士川游『日本医学史』、加藤弘之『我国体と基督教』、那河通世『訳註成吉思汗実録』、大隈重信編『開国五十年史』、早稲田大学出版部『大日本時代史』、波多野精一『基督教の起源』、喜田貞吉『韓国の併合と国史』、沢柳政太郎『孝道』、そして1911年の西田幾多郎『善の研究』、宇野哲人『孔子教育』まで、あわせて142点である。これらの著名図書について『国立国会図書館所蔵明治期刊行図書目録』で各分類をみたものが表6²²⁾である。

これらを概観して気づく点を列記してみる。まず、明治初期には維新・開化のものや西欧文明による感化にかかわるものが散見される。維新という日本歴史の大転換とそれにとまなう西欧の導入である。そしてそれ以降日本の大陸政策に関わるもの、さらに日本文化の出自である仏教や儒学・陽明学、そしてそれら中国や朝鮮の文化を融合・消化し形成してきた日本文化論や「支那学」・東洋学がある。また、日本独自の文化としての国学・神道・武士道に関するもの、そして日本の各分野の歴史記述なども多く、語学・国語学も目につく。社会科学は教育分野が中心で日本の芸術も選ばれている。これら明治期の日本著名図書は、開国以降の日本の歩みがうかがわれる選書となっている。採録された142点が適当な点数かどうかは措くとしても、これは、海外に指し示すべき〈日本〉を明らかに意識して選択された〈日本〉の表出としての目録であるといつてよいと思う。

以上、いささか長い道のりではあったが、世紀の変わり目から第一次世界大戦を経てつちかわれてきたオトレやラ・フォンテーヌの世界書誌の試みが、国際連盟の知的協力国際委員会およびその国内委員会によるその国の著名図書目録として採録される過程を概観し、日本の著名目録を〈ニッポン図書目録〉と位置づけて検討してきた。これらの目録は、挫折はしたが世界書誌の確立や知的営為の国際化などオトレらの文化活動の理念や理想を引き継いだ“ニッポン図書目録”と名付けるにふさわしい内容であったと言ってよいと思う。

イ 『北京近代科学図書館書目』

北京近代科学図書館の設立は、義和団事件の賠償金を中国への文化事業へとあてる、いわゆる「対支文化事業」という外交政策の一環にあった。アメリカではそれは中国人のアメリカ留学のための基金として使用されたが、日本ではそれにより図書館や研究機関などを設立しようとしたのであった。なお北京近代科学図書館およびその文化活動にみられる〈日本〉については別に記した²³⁾のでここでは、経過等は最小限にとどめたい。

義和団の賠償金の使途については1918年の臨時外交調査会で検討されはじめ、23年には「対支文化事業特別会計法案」が可決成立した。そこで行なう文化事業は、教育・学芸・衛生・救恤など、そして日本への中国人留学生への同種の事業、日本でおこなう中国に関する学術研究の事業とされた。その学芸とは、たとえば図書館・研究所・試験所・講演などを意味していた。24年5月には汪一出瀏協定が結ばれ、政治的思惑からはなれた事業としてたとえば北京に一大図書館を建設するといった合意がなされた。さらに1925年5月、沈一芳沢交換公文がかわされ、東方文化事業総委員会が創設されている。その第1回総会では、北京人文科学研究所、上海自然科学研究所の設立が協議された。

当初委員会は、四庫全書続修に必要な書籍を収蔵する北京人文科学研究所付属機関としての図書館を意図していた。その後28年の済南事件で日中の関係が緊張し、総委員会の中国側委員は引き上げてしまい、それは日本国内の単独事業として引き継がれることになり、28年12月、東京と京都に東方文化学院が創設されることが決定される。31年9月の満州事変で日中の関係は完全に破局をむかえ、結局北京に一大図書館を建設するという試みはひとまず消えてしまうのであった。

こうしていったん消えた図書館の創設ではあったが、当時北京に留学していた山室三良の、北京に日本図書館を設立すべしとの進言が、中国での文化事業の見直しを考えていた官僚の構想と結びつくこととなり新たな展開をみせるのである。1935年「北京人文科学研究所ノ改組竝日本図書館開設案」がだされる。この日本図書館は北京近代科学図書館とされ、収蔵される図書は、日本において近年刊行されかつ権威ある科学にかんする学術図書（大学生程度以上）および日本の産業にかんする書籍とし、日本に留学した者・大学生・職員・研究者に無料にて閲覧させることが示された。

この「科学に関する学術図書」の収集については、開館後に館長となる山室が異議をとない、図書館は日本を紹介する図書館であるべきで人文科学関係の図書、百科事典など参考図書や日本語にかんする図書も必要と、日本の外務省と幾度か折衝した。こうした〈日本〉図書館の図書蒐集をめぐる確執の結果、第1回の注文図書である「運到目録」では自然科学や産業の学術図書が、第2回の「運到目録」では山室の目指す人文系の図書の注文も出されている。

こうして準備された北京近代科学図書館は36年12月開館の運びとなる。この植民地中国の日本図書館では、あとに述べる日本語図書の収集のほか、欧文の日本研究図書、中国人による日本研究図書や東游记、日本語学習図書を収集し、日本語講座も基礎講座、補充講座、師範科、日語研究会、日本音楽講座を各段階ごとに用意し、そのテキストも図書館で編集・刊

行するなど行き届いたものであった。また日本人の論文を中国訳して順次刊行した『叢刊』28冊や、永井潜・西田幾多郎・北原白秋などの論文の翻訳、「欧文日本研究書誌」「漢訳日本芸文類書目」など海外の日本図書館の定番としての書誌類を掲載した紀要『館刊』（6号まで）、日本語講座や活動の報告や銭稻孫による日本文学作品の中国語訳（対訳）などを掲載した月刊図書館報『書滲』などを刊行して中国人への日本の紹介や啓蒙につとめた。また展覧も盛んにおこなわれ、「中国人日本研究図書展覧会」や「日本美術図書図録展覧会」、時局の進展にあわせての「翼賛図書展覧会」「東亜関係図書資料展覧会」なども8回、12展開催されている。こうした活動をくりひろげたこの日本図書館は、図書館というせまい空間であったが、“もう1つの日本留学”とでもいえるものであった。

このように植民地中国での日本図書館としての活動を熱心に展開してきた図書館であったが、38年12月、図書館の監督官庁が外務省から興亜院にうつり、また興亜院も42年には大東亜省と改称、都度予算も削減されて苦しい経営となる。敗戦前には館長の山室と会計の園田のふたりとなった。その山室も昭和20年7月応召、二等兵であった。そして敗戦となり、この北京近代科学図書館の収蔵書は国民政府派遣文化接收員沈兼士により接收され、この日本図書館も9年たらずでその幕をとじた。

この北京近代科学図書館は、戦前期の日本図書館の、また植民地図書館としての「役割」を忠実にはたしたといえる。それは、きわめて細かい各種プログラムの用意された、ソフトではあったが「確信」的な文化侵略であった。その活動は、日本政府の中国侵略政策と伴っていた。先の日語講座についてもその開講の契機は37年の日中戦争勃発であったわけであり、「日本語の教育はその対策の一刻も猶予すべからざる当面の現実的問題」²⁵⁾と認識され、「事変勃発後3か月にして『初級日文模範教科書』巻1を発刊したというのも一にこの間の事情に寄与し得んがためであった」というわけだ。ここでは、この図書館の活動が、戦争の只中の活動であったことを示す「事件」を2つだけ記しておきたい。

1つは、開館後7か月ほどして勃発した盧溝橋事件のなかでの図書館の対応である。『館刊』第1号に「事変中本館日誌」が掲載されているのでそれによりこの図書館の動きをみていく。

衝突の翌7月8日、夜間戒厳令で開館時間短縮し7時半とする、夜勤者をふやし館長と菊池祖司書宿直、なおこの日作田荘一ら4名参観。9日、嘱託員らに欠勤がでる、夜間外出者なきにより閉館時間5時とする。15日、図書の返却不能を考慮し貸出停止。18日、万一に備え開架図書を書庫入れ、そうした措置で閲覧者の動揺をまねかぬよう館長私物の蔵書百数十冊をこの書架にいれる。27日避難命令により菊池司書ら大使館区域内に避難、開館していた図書館の閉館通告をいかにすれば刺激を与えずにすむかと考慮したが11時40分その旨掲示、利用者退館、職員にも訓話して帰宅せしむ、大門も固く鎖して厳重警戒、パン・西瓜など購入し万一に備えて書庫に搬入、用務員に動揺があり3時に訓話。28日、彭司書・願書記ら砲声のなか出勤、用務員に“館長も避難したので出勤しなくてもよい”と偽りの通告をする、図書館横にて機関銃の音、電話不通となる。29日、図書館大門外に「あやしき群衆あり」と人文科学研究所より報知。8月2日、この日より執務、この間に書庫裏の雑草はびこり除

草、図書館の後部にも人を配置し宿泊させる。4日、菊池・石倉に義勇隊・警察署・憲兵隊に慰問金を持参させ慰問。7日、特務機関武田来館し会食、文化建設について語る。8日、日本軍入場、図書館をからにして出迎え、山室「眼熱キヲ覚ユ」、明日より開館を決定、9日、朝6時半に中国人職員ほぼ到館、菊池らも到着、山室、職員を集めて文化建設の覚悟を語る、新聞社に開館の広告掲載を交渉。

と、こういう経過で図書館は8月9日より開館、閲覧者数も10月には「事変前」にもどり、また、「事変後」には北京での日本語研究熱が一気に高まったという。

もう1つは、閲覧室に時限発火装置がしかけられ火災が発生した「事件」である。²⁶⁾1938年9月27日午前1時半ころ、本館閲覧室で火災が発生、雑誌架3つ、雑誌80種を焼いて消し止めた。消火にあたっての放水の被害も含めて被害総額750円であった。西城分館の閲覧室でも不発ではあったが発火装置が発見され、また市内の日本企業でも同様の火災が発生していたといい、同時多発の計画的抗日行動であるのはあきらかであった。この事件は憲兵隊により秘密裏に処理され図書館は27日、28日を「本館図書整理のため閲覧停止」と称して休館した。当日「挨拶に来館の諸氏」として、北京中央広播電台専務理事葭村外雄（代理・放送課長木村忍）、文化事業総委員会橋川時雄、大槻敬三、同仁会病院鹽澤院長・外務省留学生矢野智広、竹内好前講師、張我軍（代理・伊藤千春）、山本正一（講師）ほか数氏、と「本館日誌抄」に記されている。この前後の日記抄をみても、「来館」との記述はあるが挨拶との記述はこの日のみであり、これらは心配して駆けつけた人たちの見舞だったのであろう。同年3月10日より図書館の日本語講師を依頼され出講していた竹内好は（9月28日辞意を表明し北京大学理学院の日本語講師となっていたが）かれの日記のなかで、27日「朝、文院長並に富田氏を訪う。富田氏留守なり。橋川氏にぶつかる。氏曰く、昨夜、近代図書館、中原公司等焼けたりと。即ち見舞に赴く。巧妙なる爆薬を仕掛けありたりと。西城は未発に了る。他に美松食堂等も被害あり。その意志に烈々たるもの感ず。10時より12時まで理学院に授業に赴く。午後、北城及西城分館を見舞う。夜、杜先生宅に夕食を饗さる²⁷⁾」とその一日の行動を記している。

北京近代科学図書館の2つの「事件」を紹介したが、このようにこの図書館は戦争の只中の、いわば前線の文化基地であった。山室は創設の発案者でもあり、持ち前のきめ細かさと使命感による全力の活動であった。状況に強いられての、また状況を見通しての活動であり一層熱意を込めての文化工作であったわけだ。先に述べた、「もう1つの日本留学」ということも、このようにしつらえられた「留学」であったということをもう一度確認しておきたい。そして図書館活動による〈日本〉の顕現といい、ニッポン図書の蒐集といい、ニッポン図書目録の編纂というの、それらは時局を満身におびた〈日本〉でありニッポンであったのである。

さて、この北京近代科学図書館のニッポン図書目録である。先述のように当初図書館では、蒐集図書をめぐっての確執があった。これらの方針は編纂された図書目録によく反映されている。1926年10月16日という開館前の日付を持つ第1回目の目録は、科学・医学・農学・工業・産業図書の目録であり、第2回目は精神科学・歴史・社会・文学・語学・美術を

表7 『第一回運到図書目録』
の内訳

科学	計711点	医学	計350点	農業	計 86点
自然科学概説	35点	基礎医学		農学	63点
天文	34点	病理及び知識	31点	農村問題他	23点
地学・地球物理	45点	細胞・細菌学	14点		
地質	23点	解剖学	22点	工業	計614点
鉱物	30点	生理学	25点	土木	85点
数学	12点	臨床医学		建築	90点
物理	84点	精神科	10点	鉄道	21点
化学	193点	内科	44点	金属・採鉱・冶金	50点
生物	41点	外科	24点	機械	92点
遺伝	15点	皮膚科	12点	電気	90点
動物	97点	婦人科	22点	化学	86点
植物	102点	小児科	11点	繊維工業	52点
		眼科	16点	醸造	22点
		歯科	14点	雑工業	26点
		耳鼻・衛生			
		産婆・看護学	18点	産業	計172点
		雑（その他）	50点	農産	77点
		薬学	37点	林産	56点
				畜産	24点
				水産	15点

主とした目録であった。

そしてまたこの目録を寄贈する折に添付された昭和11年9月16日の日付のメモには、「この目録は正確に言えば第1回選定書目であってこの目録に含まれながら実際には未だ到着していないものもある」と記されているが、このことは、この目録が、所蔵や利用を目的とした図書目録であるというよりむしろ、所蔵すべき図書を外向けにアピールしようと意図した、いささか政略的でイデオロギー的な性格を持ったものであったということを示している。それゆえ、これが当時の〈日本〉を、また「外地」にたいしてニッポンをより一層よく指し示す目録であったということをも意味している。これがこの目録を〈ニッポン図書目録〉としてとりあげ、検討する理由でもある。

さて、これら北京近代科学図書館のまとめた目録は『北京近代科学図書館書目』として全部で12冊ある。まず『近代科学図書館第一回運到図書館目録』である。これは自然科学・医学・農学・工業・産業図書と雑誌からなる。その内図書の点数を表7にしめす。なお、先にも述べたが、この目録にあげられた図書は、あくまで開館前後に選択され注文された図書であり、該館の蔵書すべてではない。ただ、ニッポン図書といいうる蔵書を構築していくために、まず優先的に選ばれた図書群である。

ちなみに一例として生物学の例をしめせば、小松春三『生物学精講』、石川光春『生物学大観』、小久保清治『浮游生物分類学』、白井光太郎『日本博物学年表』、市村塘『動物植物顕微鏡実習摘要』、小金井良精『人類学研究』などである。

いわゆる新官僚たちが蒐集しようとしたこれら「近代科学図書」は、高度な専門書は省い

表8 『第二回運到図書目録』の内訳

総記	77点
精神科学	117点
歴史	76点
地理	9点
社会科学	122点
語学・文学	66点
語学・文芸	64点
自然科学	30点
医学	26点
産業	18点
工芸学	52点
(工業学?)	
美術・諸芸	27点

て、それぞれの科学分野の基本的な図書・概説書・教科書などからなっている。それは北京での大学教育の教科書として使用、といったことも考慮に入れてのことかもしれない。これらのことは、近代日本のこの時点での到達点、つまり明治維新前後より西洋文明を吸収・消化した上での〈日本〉を「近代科学」に象徴させるかたちで現出させ中国を啓蒙しようとしたということを意味している。もっといえば「近代科学」とは、〈日本〉を中国の個々人に紹介するといった山室の意図とはまったく別の、物質的基礎＝マスとしての近代科学をもって日本を表現し、中国にたいし体制的な見地から近代化・工業化を遂行し植民地化をおしすすめていこうとのあらわれであったといえようか。

一方、山室の推進しようとしていた人文・社会科学の図書や参考図書など日本紹介図書の選定は『北京近代科学図書館（書目第二）第二

回運到図書目録』で表明されている。その各分野の点数を示せば表8のようになる。

これら分類項目と各図書の分類にはいささか疑問の余地もあり、そのことはこの『目録』の「注」でも表明されている。つまり、本来は分類原則により分類し記号を付して目録と称すべきであるのだが、余りにあわただしく編纂したので正式な目録たりえず、これは言ってみれば図書名簿というべきものであり、また精神科学や歴史などを分離して考えるということにも問題がないわけではない、と述べているがそのとおりであろう。総記には各分類の辞典類も含まれていて、たとえば『大言海』『日本文学大辞典』『新英和大辞典』『大百科事典』『日本経済史事典』『国民年鑑』『日本労働年鑑』などとなっている。先の表にはとりあえず目録のままの数字をあげた。総記はこのように各分野の辞事典・統計・年鑑などがあげられているが、各分野の参考図書としてもまだまだ手薄ではある。精神科学については、井上哲次郎『日本精神の本質』、加藤仁平『日本精神の発達と教育』、寛克彦『神ながらの道』、新渡戸稲造『武士道』、平泉澄『武士道の復活』、井上哲次郎『日本陽明学之哲学』などで日本精神・神道・哲学・宗教などからなるが、ここでは日本精神や国民性関連の図書の採録が中心であることは明らかである。分類を精神科学としていることからわかるように、日本の顕現はまず日本精神からといったことのうかがえる力をいれた選書である。

歴史は、柳田国男編『日本民俗学研究』、和辻哲郎『古寺巡礼』、浜田青陵『東亜文明の黎明』、鳥居龍蔵『人類学上より見たる西南支那』、津田左右吉『神代史の研究』、羽田亨『西域文明史概論』、桑原隲蔵編『東洋史説苑』、内藤湖南『東洋文化史研究』など日本史とともに多くの東洋史・「支那史」・「支那学」がとりあげられている。中国にたいする〈日本〉の提示としての日本史だけでなくこうした東洋学・「支那学」の採録には、日本における中国研究の提示というにとどまらず、日本文化の基層をなす中国研究およびそれゆえの、日本の東洋学・「支那」学に対する気負い、その水準の高さへの、過大な自負といったものが感じられる。伝記は本居宣長、二宮尊徳、福沢諭吉、大久保甲東（利通）、西郷南州（隆盛）、吉田松陰、頼山陽、新渡戸稲造、夏目漱石の10人の評伝が見られるが、とくにこれが日本の偉人というわけでもあるまい。まだまだ選択の途上であろう。地理学についても各地方の鉄道

省編纂『日本案内記』がみられるぐらいで地理・案内などは日本を紹介する資料としてももう少しとりあげられてしかるべきであろう。

社会科学は牧健二『日本法制史概論』、穂積八束『憲法提要』、尾高朝雄『法哲学』、横田喜三郎『国際法』、我妻栄『民法総則』、田中耕太郎『商法総則概論』、穂積陳重『法律進化論』など法律が主流で、鈴木安蔵『日本憲政成立史』、幸田成友『日本経済史研究』など政治・経済も少しみられる。法律関係の図書に重きがおかれているようであるが、中国における日本の経済活動などの法律的な側面を考えてのことであろうか。

語学・文学、文芸は、藤村作『近世国文学序説』、文部省『尋常小学・高等小学国語読本』、松浦珪三『文語口語対照現代日本語文法』、山田孝雄『日本文法学概論』、本間良平『日華会話入門』とそれぞれまだまだ少ないが会話・文法などの蒐集の構えが感じられる。ほかに岩波文庫で、『日本書紀』から『万葉集』『源氏物語』などの古典文学と、森鷗外『うたかたの記』、正岡子規『墨汁一滴』、夏目漱石『坊っちゃん』、芥川龍之介『侏儒の言葉』など（当代の）現代文学まで139点を選択している。古典や当代文学を岩波文庫でとりあえず網羅しておくという方法は今日の蔵書構築でもよく使われる手ではある。吉村冬彦『藪柑子集』、寺田寅彦『万華鏡』など随筆も少しだがみえる。

自然科学・医学・産業・工芸学（工業学）図書も第2回分に含まれているがそれは第1回の追加であろう。美術・諸芸については、東洋陶磁研究所編『唐三彩図譜』、黒田鵬心『日本美術史概説』、藤懸静也『浮世絵』、伊庭孝『日本音楽概論』、高橋芳雄『茶道読本』、伊原敏郎『日本演劇史』などがあるが、この時点ではまだまだ少ない。芸術は〈日本〉の紹介には欠かせない分野であるが、これはのちに美術図書や図録、絵巻物の展覧会を開催するまでの図書群を蒐集し、ニッポン図書の一角を占めることになる。

書目の第3は『叢書論文集細目（第一）』である。これは、記念論文集の所収論文や叢書の各巻書名の細目である。ここに収められている図書は芸術・東洋史・日本精神・維新史など21点で、例えば『大塚（保治）博士還暦記念 美学及芸術史研究』『高瀬（武次郎）博士還暦記念 支那学論叢』『狩野（直喜）教授還暦記念論叢』『内藤（湖南）博士頌寿記念 史学論叢』、西晋一郎・磯野清『代表的国学者の日本精神観』『日本精神研究 全7巻』、徳富猪一郎『近世日本国民史』、熊田葦城『日本史蹟大系』などである。

書目第4『叢書論文集細目（第二）』は、冀察政務委員会宋委員長の寄贈の『四部備要』、岩波講座の『東洋思潮』『日本歴史』『日本文学』、柳田国男編『日本民俗学研究』、寄贈された『（日本大学）文学科研究年報』『立命館文学』などの細目である。

第5の『叢書論文集細目（第三）』は自然科学・医学などが中心で、『第一次満蒙學術調査研究団報告』『震災予防調査会報告第百号6冊分』『名古屋高等工業学校創立二十五周年記念論文集』『日本内科全書』『化学研究所講演集 全6輯』『実用製造化学叢書』などである。これら細目としてとられた書物はいずれも先に述べた蒐集の方針にそって選ばれたものである。

書目6は、主として日本図書の中国語訳された中国語図書の各分類図書と寄贈された図書からなる『中文図書目録（第一）』、書目7は欧文で書かれた各種団体および個人による日本

関連図書や著作を収めた *Catalogue of Books written in European Languages*、書目8は、開館準備中の3か月間の援助に感謝し寄贈図書・雑誌の目録を作成して謝意を表する、とした昭和11年12月5日付の「謹告」を持つ『寄贈日文书籍目録』である。受贈先は、同仁会・上海自然科学研究所・満鉄・満鉄地質調査所など在中国の機関、日本学術振興会・日印協会・日仏協会・日独協会等、そして大東文化協会・国際観光局など各種機関、大学・研究機関・図書館・出版社などである。

書目9からはようやく『新着図書目録』となり、購入・寄贈・寄贈雑誌にわかれそれぞれを日文・中文に分かつてある。日文の図書については、開館前の、いささかイデオロギー的で外向けアピールといった色彩の強い選書にくらべて、落ち着いた選書となっている。図書整理に必要な分類表や件名表目表、精神科学では、古典的な哲学や思想家の著述も補充され、多く作家の作品や全集が追加されている。

書目10は、*Catalogue of Scientific Essays, Journals and Reports of Universities and Institutions in China and Japan* で中国や日本からの欧文の寄贈雑誌の所収論文の細目で14機関のものからなる。まがきに、これら論文は分類されてもいないし索引もないが中国や日本の学術団体との関係を確立するため不十分なまま刊行した、との弁明がある。

書目11は『新着図書目録』で、書目9と同じく開館前の北京近代科学図書館の日本図書館としての蔵書構築の基本線を補うかたちで昭和12年5月受け入れ後の購入図書および寄贈図書をかなり購入し、また寄贈でうけいれている。出版年鑑や書物随想・個人全集、そして岩波文庫で欧米文学を122点、また同じく岩波文庫で自然科学や法律・政治など各分野の図書を購入するなど、蔵書の裾野をひろげてきた。哲学も西洋のものをプラトン、アリストテレスからカント、ヘーゲル、さらにプラグマティズムまで買い足し、また安岡正篤『日本精神通義』、伊藤角一『ますらごころ』、渡辺幾治郎『教育勅語渙発』、大西貞治『古代日本精神文化の研究』などの日本精神に関連する図書も補充している。そのほか各種日中辞典や各国語の辞典、国語学や文法書も加えて、図書館での日本語講座や日本語教科書編纂さらには館報『書滲』や『館刊』の論文や中訳など館全般の活動と有機的に結合できるよう蔵書も充実させてきたようである。

書目12も昭和13年1月至6月受け入れ分の『新着図書目録』で、ここでは新潮文庫や春陽堂少年文庫を入れ、また仏教やキリスト教にかんする著作も目につく。またこれは日文図書に分類されているが日中対訳の読本や日語会話の類も数多く購入している。これは1939年に中国人の日本研究図書、日文原著中文翻訳書、中国人著・日本語学書などあわせて展覧された「中国人日本研究図書展覧会」の基礎資料となるものである。

こうして収蔵され構築されてきた図書は、1940年11月末の統計では、図書5万2215冊、雑誌1504冊、その後清華大学の蔵書・標本を中心に華北占領地区の資料のうち中国側に返還された残りの、図書館が保管することとなったいわゆる軍管理図書2万5379冊等々あわせると約10万冊を数えることとなった。先の12冊の書目に収められた図書およびその後に見集められた図書群をもって占領地中国に出出したニッポン図書というわけだが、図書館の開館準備期に、〈日本〉を顕現しようと中国にたいし気負って選択した第1、2回の運到目録をもって、

北京近代科学図書館の「ニッポン図書目録」といっておきたいとおもう。

(3) 〈ニッポン図書目録〉の比較と評価——むすびにかえて

以上、ニッポン図書目録の源流となるものとして、知的協力国際委員会の「著名図書目録」と北京近代科学図書館の「運到目録」のふたつをとりあげ、その編纂の背景や経緯、内容について述べてきた。前者は文字どおり点数も制限され精選された著名図書のリスト、後者は選定されているが架蔵のための図書館の収集リストであった。選定された時代も、一方は1920年代の国際連盟の活動を背景として1928年（昭和3年）に、他方は日中戦争開始前年の昭和11年とそれぞれに異なる。また、連盟の知的協力国際委員会という世界から認知されオーソライズされた機関の指示による選定目録と、いずれ破局に向かうこととなる中国での植民地図書館の選択目録・架蔵という違いもある。もちろん選定の目的も異なるし主担の選定者も一方は姉崎正治（宗教学）、他方は山室三良（中国哲学）と、専攻やキャリアもちがっていた。

にもかかわらず両者は、その時代の〈日本〉を示し、人や機関の目に映った〈日本〉を厳選し、それをニッポン図書目録として編纂して、他国へ世界へとおくりだした。他国へ世界へと日本を表明し顕現した目録、つまりニッポン図書目録としてこのふたつは、並列して検討するに値する歴史的背景を持った目録であったと思う。

ここまでこの目録についてその編纂や選定の経緯、背景にある理念を述べ、その内容に簡単に触れてきたのだが、目録や蔵書の評価ということになると大層難しい。蔵書評価論については1930年代のアメリカでのチェックリストによる評価を論じた河井弘志の労作「チェックリストによる公共図書館蔵書分析評価法²⁸⁾」があるがそのなかで河井は蔵書評価の方法を、量的分析として、蔵書資料総数、種別別蔵書資料数（成人・児童別、一般図書・特殊図書・地方資料別など）、主題別蔵書資料数、図書資料費、の4方法、質的分析として、チェックリスト法、蔵書点検（学識経験者などによる）、利用との比較（蔵書統計と利用統計との比較）、Desiderataとの対照（切実な購入希望・利用希望との比較）、蔵書類型との対比（いくつかの蔵書の類型を設定し検討）の5方法に整理している。このなかのチェックリスト法とは標準図書リストを用意しそれで所蔵を調べて蔵書の評価をしていく方法であるが、河井は、カーノフスキーが1933年にシカゴ近郊の公共図書館を蔵書調査した折に、ALA（アメリカ図書館協会）カタログ1926—1931（2711タイトル）、ブックリスト1932（226タイトル）ほかを使用したとのべている。日本では、この時期まで刊行されていた、図書館創設の収集・所蔵確認のための文部省編纂『図書館書籍標準目録』があり、ちなみに明治44年6月以降大正4年12月までに刊行のものは2400部が収載されている。

ここでは、海外に流出したこのふたつの目録のそれぞれに重なって収録されているものや「著名図書」が図書館に実際どれぐらい所蔵されていたかなど、蔵書評価とまではいかぬが、河井のいう質的分析にあたることからすこしでも触れていくことでむすびとしたいと思う。

知的協力国際委員会の「著名図書目録」と北京近代科学図書館の「運到目録」ではともに

哲学・宗教や東洋学が厚く選ばれている。たとえば共通に採録されているものとして、宇井伯寿『印度哲学史』、桑原隲藏編『東洋史説苑』、狩野直喜『支那学文藪』、松本文三郎『東洋文化の研究』、井上哲次郎『日本古学派之哲学』『日本朱子学派之哲学』などがあげられるが、これはニッポンを書物で表現するにはやはり日本文化の出自のひとつである仏教や儒教・朱子学を、そして「支那学」「アジア学」を表出すべき、ということになるのであろう。そして「著名図書」のほうには、(著作の年代が今少し早く時代背景も異なるということもあろうが) いわゆる日本精神を前面にだした書物はあまり目につかない。そのほかに両者に共通の選定図書としては、国史、国文学・国文法がある。藤岡作太郎『国文学史講話』、山田孝雄『日本文法論』、津田左右吉『神代史の研究』、幸田成友『日本経済史研究』などである。歴史分野は日本紹介として不可欠であろうしまた国文・国文法についても著名図書や日本紹介図書としてはよくわかる。しかしながら「著名図書」のほうに当代の文学作品がふくまれていないのはいかにもさみしい。一方で、藤懸静也『浮世絵』、今泉雄作『日本陶瓷史』、奥山錦洞『日本書道史』、伊庭孝『日本音楽概論』、坂井犀水『日本木彫史』など日本の美術・陶芸・音楽など芸術分野の通史・概説などが「著名図書」にも共通に採られているのを見ると、日本が西洋世界に表出され得るのは浮世絵・書道・陶芸といった美術関係であろうかと、西洋にたいするオリエンタルな異国趣味の壁とでもいうものを感じさせられる。

次にこれら日本を代表する知的協力国際委員会選定の「著名図書」が当時図書館にどれくらい所蔵されていたかを大阪府立図書館の所蔵率でみる。²⁹⁾1924、25、26年の目録にふくまれる55点のうち所蔵は50点で91.0%である。また同時期の帝国図書館の加藤宗厚の所蔵調査もあるがそれによると所蔵49点であった。また1927、28、29年の目録所載71点のうち大阪府立の所蔵は62点で所蔵率は87.3%、さらに1800年から1911年までの明治期の著名図書142点の所蔵を『国立国会図書館所蔵明治期刊行図書目録』で当時の帝国図書館での所蔵をみると、133点、所蔵率93.7%である。日本を代表する書物にしてはもう少し所蔵があるかとおもったがいささか意外な結果であった。

ちなみに、著名図書目録を編纂した知的協力国際委員会日本国内委員会は図書館界とは無関係の機関であり、国際委員会付設の「科学と書目の小委員会」では各国の図書館員専門家会議も持たれていたが日本の図書館界は無縁であった。姉崎は当時日本図書館協会の専務理事であったはずだが知的協力国内委員会には図書館界の代表として出ていたのではなかった。また、これは象徴的なことだと思うが、この著名図書目録を図書館界に紹介したのは、日本「内地」の図書館員ではなく満鉄撫順図書館館長であった大佐三四五である。『撫順図書館報』第1号に載ったこの報告は「世界的良書」と名付けられ、その編纂の経過も要領よく前文に記されている。1928年にフランス、イギリス、アメリカそれぞれの国で選ばれた著名図書(の一部)とともに掲載された同年の日本の著名図書=「世界的良書」に大佐は、大連図書館所蔵の図書に◎を付している。そしてそのなかで、「大連図書館ノ特別室デ朝夕御研究ヲ続ケテ居ラルル御姿」の八木燹三郎の著述『満州考古学』が採録されているのを取りあげ、「先生ノ著書ガ世界的ニ価値アル良書ト国際連盟ノ機関ニヨッテ正銘付ケラレタルヲ見テ多大ノ喜ビヲ感ズルノデアル」と述べている。満鉄図書館は満鉄社業の図書館また満鉄

表9 『書目』所載分類別図書冊数
(昭和12年12月末現在 推計)

総記	1549冊	15.2%
精神科学	479	4.7
歴史科学	1324	13.0
法・経・社会	1810	17.8
文学及語学	1195	11.8
自然科学	1385	13.6
医学	745	7.3
工業	951	9.4
産業	532	5.2
芸術	207	2.0
計	10177	100

表10 開館後1年間の国籍別閲覧人数

	中国人	日本人	他外国人
昭和11年12月	371	115	1
昭和12年1月	426	166	0
2月	495	165	2
3月	597	116	0
4月	1083	180	1
5月	1121	225	0
6月	1112	255	0
7月	1056	103	0
8月	490	48	2
9月	697	43	0
10月	1234	115	0
11月	2406	88	0
計	11088	1619	4
昭和15年度	25310	13907	10

沿線の日本人を対象とする図書館ではあったが、「満州」という異郷の地にあって一層、〈日本〉の著名図書に心を動かされ、「ニッポン」に強く感応したのであろう。

この記事はその後『図書館雑誌』³⁰⁾に転載され、それをみて「内地」帝国図書館の加藤宗厚が「続世界的良書」を書いた。加藤は冒頭で「前号所載撫順図書館長大佐三四五氏の“世界的良書”の紹介は図書に特殊の関係を有する我等の夙に承知して

置かなければならない問題であった。然るに吾人は寡聞にしてこの問題について何等の知識を有して居なかったことは誠に慚愧に堪えない」と述べ、協力委員会のメンバーにたいして不安があるわけではないがこうした問題に日本図書館協会が協会として発言権を有しないことは協会の微力の証左であり遺憾に思う、と続けている。こんなところにも、「内地」日本の帝国図書館と「外地」満州の満鉄図書館のそれぞれの場所で書物を扱う図書館員の、〈日本〉に対する想いの異なりを感じさせ興味を惹かれる。

最後に北京近代科学図書館開館1年後の所蔵冊数と利用状況を示す。図書館の分類別蔵書統計が見当たらないので運到目録・新着目録のうち分類してあるものだけの数字をあげた。実数と大きく差があるが蔵書の分類比率ということでみておきたいとおもう。³¹⁾それらは表9、表10、表11の通りである。

開館後1年間の分類別所蔵比と利用をみると、精神科学や歴史・社会科学は蔵書冊数に比較して利用がやや少ない。自然科学・医学・芸術はまずまずであろうか。文学・語学については予想通り利用の方が圧倒的に多い。小説など文学の読書のほか日語講座の開始など

表11 開館後1年間の分類別利用冊数(館内・館外)

			参考 昭和15年度	
総記	595冊	8.6%	4920冊	15.0%
精神科学	141	2.1	1315	4.0
歴史科学	338	4.9	1932	6.0
法・経・社会	488	7.0	2287	7.0
文学及語学	2663	38.3	10069	30.7
自然科学	1285	18.5	2321	7.1
医学	605	8.7	2386	7.2
工業	452	6.5	1457	4.4
産業	203	2.9	875	2.7
芸術	174	2.5	5208	15.9
計	6948	100	計32770	100

表12 大阪府立図書館蔵書類別表
(昭和11年度末)

総記	32953冊	12.2%
神書及宗教・哲学	22511	8.4
歴史・伝記・地誌及 紀行	40937	15.2
教育・政治・行政・ 法律・兵事・社会・ 経済・財政・統計	34529	12.8
文学・語学	51264	19.0
数学・理学・工学	33367	12.4
医学	10973	4.1
工業・家政	17164	6.4
産業・商業・交通運 輸	13983	5.2
美術・諸芸	11523	4.3
計	269204	100

表13 大阪府立図書館貸付図書類別冊数
(館内・館外 昭和11年度末現在)

総記	18151冊	3.0%
宗教・哲学	41105	6.7
歴史・伝記・地誌 教育・政治・法律・ 兵事・社会・経済・ 財政・統計	65792	10.7
文学・語学	101937	16.5
数学・理学・工学	146175	23.7
医学	90702	14.7
工業・家政	20738	3.4
産業・商業・交通 美術・諸芸	68887	11.2
	39475	6.4
	22905	3.7
計	615867	100

の影響もあるであろう。参考までに昭和15年度の統計もあわせてみると、総記・芸術がふえて自然科学・工業が減少済みである。総記についてはここに分類されている個人の全集や各分野の岩波文庫の利用がかんがえられるがそれ以外に調査や照会も増えたのであろうか。また芸術部門がふえているがそれは「日本美術図書資料展覧会」「日本絵巻物展覧会」などの開催にあわせて開館後も蔵書を充実させ利用が伸びたのであろう。

参考までにこの時期の大阪府立図書館の蔵書および閲覧・貸出冊数は表12、表13の通りである。³²⁾

北京近代科学図書館の分類別蔵書冊数の比率を大阪府立図書館のそれと比較してみると、宗教・哲学部門は「精神科学」にこだわっているのか冊数がまだまだ少ない。また文学・芸術も大きく下回っている。自然科学・医学・工業といったところは、「近代科学」を看板にしているだけあって蔵書の比率も大きい。それでも、開館当初の大車輪の収集にしてはまずまずの蔵書比率であるとの印象をうける。

次に閲覧・貸出冊数をみてみると、北京近代科学図書館では、語学講座開講により、また日本図書として日本の文学が取り付きやすいのか、文学・語学部門が圧倒的である。そして看板の自然科学・医学もよく利用されている。一方、精神科学、歴史・社会科学が意外と読まれていない。ニッポン図書としては「通俗書物」³³⁾があまり顧慮されず、思想や政治制度・風土が異なった上で書かれた資料としていささか硬かったのかもしれない。

以上、著名図書目録と北京近代科学図書館の書目のふたつのニッポン図書目録について十分とはいえぬがその蔵書の検討をしてきた。オトレやラ・フォンテーヌの世界書誌作成を源流にもつ「著名図書目録」は、結果的には限られた点数ではあったが、そのうちには〈すべて〉を表出するという意志が含まれていた。また北京近代科学図書館の書目には、その時代と状況に大きく規定されながら日本を中国に紹介し顕現させるべき書物が採録されていた。このふたつの目録はともに、そのように〈日本〉を映し出し、それぞれの時代を反映した、いわば〈日本〉という世界のミニアチュールとしての鏡であったといえるであろう。

かつてボルヘスは、『バベルの図書館』のなかで、ひとはその図書館の六角形の棚のどこかに、残りすべてに対する完全な概要である本が存在すると推定し、ある図書館員がそれを精読して今や神にも相似していると述べた。また『砂の本』のなかでは、初めも終りもない本からページが湧き出てくるような一冊の無限の書物のことを書いた。その無気味で大した書物は「大英博物館」といった機関に収蔵されないで「国立図書館につとめるわたし」という一個人の手に落ち、その本のことを「怪物じみている」と思いはじめた「わたし」は館員のすきをついて、図書館の地下の湿った棚にかくすのであった。

かくのごとく夢想される無限と凝縮の書物はおぞましくまた狂気じみてもいるが、「残りすべて日本に対する完全な概要」である書物という言い方はよくわかる気がする。図書館が蔵書を構築するおりには多かれ少なかれそうした世界の反映、世界の凝縮という気分を持つ。このふたつの〈ニッポン図書目録〉の書物群は、〈日本〉を指し示すべき「無限と凝縮」の書物に似た意味合いが込められて採録されたことは確実であろう。つまり、日本の著名図書であるということ、日本精神や日本の科学をよく言い表わした書物であるということによりよく日本を表出しようとしたのであった。

現在でも海外で日本図書館や資料室を創設するときには、日本の「著名図書」や「日本精神」を体現する、とまでいかななくても、〈日本〉をよく表わした書物を集積するということは意識されるであろう。というより、もう少し客観的な視野に立って選書される、ということになるのであろうか。たとえば北京外国語学院日本学研究中心の蔵書目録やケニアのナイロビ大学に新設された日本語学科に寄贈された日本関係図書の蔵書一覧³⁴⁾などがその例である。

ここでのべた著名図書目録はわずか数年でその試みは中断された。北京近代科学図書館の蔵書は戦後すぐ中国に接収されその図書館は今はいない。そしてその図書館にかつてこうして集積された「ニッポン図書」の書目だけが目録として遺されてしまっている。

そんな目録ではあったがこのふたつの目録で体現されようとしたその時代のニッポンは、今またこの時代のニッポンとして表出される機会が巡ってきている。あの時代のニッポンとこの時代のニッポンとどこが同じでどこが異なるのか、もう一度振り返ってみても無駄ではあるまい。「著名図書目録」と『北京近代科学図書館書目』はともに〈ニッポン図書目録〉の源流として検討されるだけの意義があると考えた次第である。

注

- 1) 黒丸尚訳 早川書房 1992年。
- 2) モスタファ・エル＝アバディ著 松本慎二訳『古代アレクサンドリア図書館』中央公論社(新書)1991年。
- 3) 河島英昭訳 東京創元社 1990年。
- 4) 京都大学法学部図書館所蔵、天野敬太郎の寄贈で昭和20年3月31日に受け入れられている。
- 5) 以下のオトレらの活動については主として Boyd Rayward, W. *The Universe of Information, The Work of Paul Otlet for Documentation and International Organisation*. Moscow: VINITI および、今まど子『UDC の手引き』日本ドクメンテーション協会 1978年の解説などを

参照した。

6) 岡村敬二「世界書誌の夢—オトレトラ・フォンテーヌの世界宮殿」『大阪府立図書館紀要』第29号 1994年。

7) 新渡戸は1920年5月から26年12月まで事務次長をつとめた。

8) その内容については、岡本剛「学問芸術の国際化問題（正・続）」『国際知識』1925年4、5月、学芸協力委員会編纂『学芸の国際協力』（国際連盟協会パンフレット第69輯）国際連盟協会など参照。

9) この訳語については事務局的な任を果たしていた国際協力協会では学芸協力委員会をあて、のちの国内委員会発会式でも「本委員会を学芸協力委員会と称す」とある（『国際知識』1926年6月）。また同誌掲載の論文では知的協力委員会を使っているのもみうけられるし知的協調としているものもある。27年5月の委員会ではこうした訳語について統一することを議論し Intellectual Co-operation は学芸協力とした。また山田は学芸協力と呼称していたがのちの『回顧録』（山田三良先生米寿祝賀会刊 昭和32年）では国際知的協力委員会と記している。いずれもこねない訳語ではあるが本稿では、知的協力国際委員会と表記を統一した。

10) 知的協力国際委員会の活動をまとめたものは先にあげたもののほか、山田三良「国際連盟図書館学芸協力—日本学芸協力委員会の創設」『国際知識』1926年6月、『国際連盟年鑑』（大正15年）・（昭和3年）・昭和4年版・昭和5年版・昭和7年版・最終版日本脱退の前後（昭和9）など参照。

11) 大正15年版の『国際連盟年鑑』では「一切の図書のリスト」と説明している。

12) 国際連盟の第5委員会は「日本の首都に於ける大学及図書館の受たる災厄を悲しみ其の文学及科学に関する蒐集品の回復を容易ならしむる為国際的援助の方法を攻究する様、知的協力委員会に根請」した（「学界の大損失」『国際知識』23年10月）。

13) 文学と美術に関する小委員会は、知的協力連続談話会として、1932年に第1回「ゲーテについて」（フランクフルト）から37年7月の第8回（パリ）まで開催されている。そのうち33年10月の第3回「ヨーロッパ精神の将来」（パリ）、35年4月の第5回「現代人の建設」（ニース）の議事録は『精神の将来』『現代人の建設』の書名で知的協力国際協会著 佐藤正彰訳で創元社から刊行されている。

14) この名称もいろいろで前掲の山田論文では学芸協力国際学院と訳し、巴里国際学院と言い習わしており、当初『国際知識』の「本協会ニュース」でもそれにならっていたが、のち学芸協力国際協会と呼び変えている。

15) 各部長などについては前掲山田論文参照。

16) 世界宮殿についてはプリンストン大学図書館館長エルネスト・カッシング・リチャードソンの“International Co-operation in Intellectual Work.” *The Library Journal*, November 1, 1922 にくわしい。

17) 国内委員会の発会式およびその成立経過については『国際知識』26年6月の「学芸協力委員会発会式兼相談会」、前掲山田論文参照。なおこの知的協力国内委員会がのちの国際文化振興会の主要な母体のひとつとなる。そうした事情については拙稿「戦前期海外の日本図書館と国際文化振興会」『大阪府立図書館紀要』第28号 1992年参照。

18) 著名図書目録という名称ではなかったが、文部省の編纂で、明治43年以前刊行のものについて『図書館書籍標準目録』が刊行され（明治44年10月、編纂委員は市嶋謙吉、今井貫一、佐野友三

郎、田中稻城、湯浅吉郎、和田万吉、渡辺又次郎、約千点)以降も続けて編纂・刊行されている。「通俗図書館ニ於テ最先ニ備付クベキ本邦刊行書籍ノ標準ヲ示セルモノ」として平易で利用の多いものを収載したとあるが、かなり専門的なものもふくまれており、内容的には著名図書目録に近いものであると考えられる。

- 19) 1927年5月の委員会ではこの目録のことを「最近出版書籍の解題書目」とよんでいる。
- 20) ここではこの著名目録のことを「各国名著表」としている。
- 21) 山田三良「学芸協力国内委員代表者会議の概況」『国際知識』1929年11月。
- 22) 分類は各図書館により異なっている。そしてこの表ではたとえば哲学と宗教、歴史と地理なども分けて表示した。
- 23) 拙稿「北京近代科学図書館の〈日本〉」『日本研究』第7集 1992年。その設立経過や活動については小黒浩司「北京近代科学図書館史の研究Ⅰ・Ⅱ」『図書館学会年報』Vol. 33, No. 3, 4 1987年に詳しい。
- 24) 『北京近代科学図書館一週年報告』(館刊臨時号)昭和12年、および『北京近代科学図書館概況』昭和14年など。
(ママ)
- 25) 前掲『概況』。
- 26) 前掲小黒論文および『山室三良氏インタビュー記録 北京近代科学図書館』特定研究「文化摩擦」1980年。
- 27) 竹内好「北京日記」『竹内好全集 第十五巻』筑摩書房 1981年。
- 28) 『Library and Information Science』No. 9 1971年。
- 29) 著名図書目録の書名にはかなり誤記があり、また叢書名でとっているものなどもあるので実際の所蔵率はもう少しあがると考えられる。このことはこのあとの帝国図書館の所蔵についても同じである。
- 30) 131号(昭和5年10月)および132号(11月)。
- 31) 昭和12年11月末現在の所蔵図書数の実際は2万1391冊であった(『書滲』第24号 昭和15年12月)。国籍別閲覧人数は『書滲』第35号 昭和16年12月)、分類別利用冊数は前掲『一週年報告』による。
- 32) 『大阪府立図書館三十三年報 自昭和11年4月至昭和12年3月』による。
- 33) 国際文化振興会主催の「対支文化工作に関する協議会」における嘉治隆一の発言『対支文化工作に関する協議会要録第7輯 支那』。
- 34) 『(北京日本学研究中心) 図書資料部蔵書目録 1985年—88年』1989年、および『(北京日本学研究中心) 図書資料館蔵書目録 1989年—1991年』1992年。土屋哲「ケニヤに日本文化研究の種を播く」『図書』1990年9月。